

Stone Test 開発に向けた基礎的研究

—描画特徴の指標化とキャッテル不安診断検査との関係—

Basic Study on Developing of the Stone Test

—Indexing and Relationship with the Cattell Anxiety Scale—

上田 琢哉
Takuya UEDA

I はじめに

石は、古代からわれわれのもっとも身近にある自然であった。石には「固くて冷たいもの」や「融通が利かないもの」「誰にも相手にされないもの」といったネガティブなイメージがある一方で、「貴重なもの」「安定しているもの」、さらには「エネルギーを秘めたもの」といったポジティブなイメージもひそんでいる。極言すれば、“石は無機物でありながら永遠の生を感じさせる”（von Franz, 1964）特別なイメージをもつものである。そのため、石は武器や建築などの実用に供されるだけでなく、むしろ祀られたり、歌われたり、あるいは単に眺められたりしてきた。われわれは石にさまざまな想いを投影して生きてきたのである。

Jung, C.Gが石にとりわけ強い関心を抱いていたことはよく知られている。事実、彼はその興味深い自伝の中で、幼少期の頃、ライン川からとってきた小さな石を常にポケットに入れて持ち歩いていたというエピソードを残している（Jung, 1963）。Jung, C.Gは石のイメージを植物のそれと比較しながら、次のように述べている。“石の中には宇宙の限りなさ、有意味なものと無意味なものとの混乱、および非人格的な目的と機械的な規則との混乱などが隠されていた。石は存在の底知れぬ神秘さ、つまり霊の具現を含んでおり、同時にそれそのものであった”（Jung, 1963）。

ところで、日本人はこのような石のもつ（明確に言語化しづらいほど複雑な）イメージに特別敏感で、さらに豊かな感性をもっているように思われる。例えば、西洋では美的な観点から希少な、特別な石が好まれるのに対し、日本人の石への関心は、より素朴な、ありふれた石であることが特徴的である。「雨に濡れた石を美しいと思う」ような美的感性は、日本人ならではのものであろう。しかも、これは決して過去の感性ではなく、つげ義春の『無能の人』などにも描かれ、現在でも十分共感を呼ぶ感覚なのである。

唐木（1990）は日本人の石に対する感性について次のように説明した。唐木は、存在としての石を存在のまま生かしたのは、室町時代あたりに始まるのではないかと言い、この時代は同時に「さ

び」という観念が出てきたときであることを指摘する。その上で、その頃に生まれた“存在が存在として、すなわち人工の技巧や思惑を加えることなしに、そのままに美しいという思想”，それが自然石をいまだに愛好する気持ちのベースにあるのではないかと論じている。

このような日本人の石に対する美的感覚やそれへの態度は、日本の庭における石表現に具体的にみることができる。

もともとわが国の庭（ニワ）は、神事などを行うための平らな場所を意味しており、西洋の garden とは必ずしも同一でない。その特徴を一言で言うならば、(西洋の庭が樹木・草花を中心に構成されるのに比して) わが国の庭は明らかに石が主役になっているということである。そのもっとも極端な形が、竜安寺や東福寺にあるような石庭であろう (Figure 1 東福寺石庭)。わが国の庭は「石を眺めるためのキャンパス」と言って言い過ぎでないのである。このことは、今から600年以上前のわが国最古の造園術の書とされる『作庭記』（森監訳, 1986）が、ほとんど石の配置のマニュアルと言うべきものであったことからわかる。このような庭作りは諸外国にはほとんど見られないものであり、日本人の石に対する独特の感性を示している。



Figure 1 東福寺石庭

しかし、日本人の石に対する愛着は美的観点からだけでは十分説明できない。そこには宗教的側面からの理解がどうしても必要になってくるだろう。

折口信夫はかつて、日本人のもっともプリミティブな信仰の対象は石であると言った。

折口（1995）によれば、古代、靈魂のことを「たま」と呼び、そこから靈魂の容れ物としての石も、同様に「たま」と呼ばれるようになったと言う。いわば“神さまなる力をば留めておくところ”が、石”であり、したがって、たまの所在として石を祀ることはごく自然なりゆきであった。

ここから、神体としての石（例：石神や磐座）や道祖神信仰などが理解できる。さらに、（重さ

の変化で吉凶を占う) 占いの石や、押さえるの石 (例: 地震を起こすと考えられた大なまずをおさえる要石) などとも考察に入ってくるだろう。また、石には神なる力が宿っているため、石が卵を生む話や石が成長する話 (例: Figure 2 下鴨神社 さざれ石) も同様に理解できるのである。このような石は日本各地に存在して枚挙に暇がない。

いずれにしても日本人にとって、美的に、または宗教的に、石の存在が大変重要であったことは疑いをいれない。われわれは石というものを常に愛好し、身近に感じて生きてきたのである。



Figure 2 下鴨神社 さざれ石

II 問題と本研究の目的

パーソナリティ研究や心理療法のアセスメントとして用いられる技法に描画テストがある。描画テストには、特定の (またはいくつかの) 描画対象を指定するものが多い。もっとも有名なものは、一本の木を描画対象として指定する Baum Test (Koch, 1957/2010) であろう。Baum Test が優れているのは、樹木が非常に豊かなイメージを内包しているために、「一本の木」というシンプルな描画対象でありながら、そこに個人の多様な側面が投影されうるからである。

Koch (1957/2010) はその著書の中で「木の文化史」という一章を割いて木のもつイメージの豊かさを詳細に論じている。例えば、世界の中心にあって世界を支える「世界樹」などは、古代の人のコスモスのありようを適切に表しており、世界各地に認められるイメージである。Koch (1957/2010) は特に、木は大地に根ざして死と再生を年ごとに繰り返すことから「生命的なもの」の象徴としてふさわしいと言う。さらには、木の姿は直立した人間に類似していることから、人間の比喩としても用いられてきたことを指摘している。

このような樹木の豊かなイメージを利用した Baum Test は心理療法の領域で大きく発展した。そ

の後、人物画や家族画、さらに「ハンドテスト」や「星と波テスト」などユニークなものも含め、多くの描画テストが開発されてきている。

さて、本論文では最初に石のイメージの豊かさについて触れたが、意外と言うべきか、これまで石そのものを中心とした描画テストは開発されてこなかった。例外は風景構成法の一アイテムとして石が描かれることくらいであろう。

もちろん先に論じたように、石のイメージは、その深さと多様性において樹木に劣らない。J.P.ルーによれば、木と石はシンボル上の意味が対立しているとされ、「木は動なる生、石は静なる生」をとらえているのだと言う (Chevalier, J & Gheerbrant, A, 1982/1996)。また、Jung派の分析家 von Franz, M.L (1964) は“人間というものは、石とはあらゆる点において異なるものであるが、人間の最も内的な中心は、不思議な、特別な意味で、石に似ている”のだと言う。

このように石は樹木に匹敵するほど豊かなシンボルであると考えられるにもかかわらず、これまで単独の描画テストの対象とならなかったのはなぜであろうか。

おそらくこの理由は、次の三点にまとめられるだろう。①石は描画対象としては単純すぎると考えられたこと。②反対に、石のイメージがあまりに複雑で、かえって描きにくい可能性があること。③石には(木のように)「成長する」、「発展する」といったポジティブなイメージがなく、出てくるのはネガティブなイメージだけだと想定されてきたこと、である。

このうち③の理由は特に大きいと考えられる。例えば、わずかにある過去の研究においても、統合失調症者の本質を石化のアナロジーで論じたもの (澤田, 2008) や風景構成法で統合失調症者に特徴的な石の描き方があるといった研究 (河西ら, 1998) に見られるように、一般的に石のもつイメージの「無機質」、「固さ」、「冷たさ」、「役に立たなさ」などのネガティブで一面的な側面が強調されたものがほとんどであった。描画検査は単なる情報収集ではなく、それが即治療行為にもなる営みであることが大切であるから、一見ネガティブなイメージが多い石は敬遠されてきたのではないだろうか。

しかし、前章で詳しく論じてきたように、石にはきわめて多様な、またポジティブなイメージが含まれていることも事実である。心理療法のプロセスにおいて、例えばクライアントの夢や箱庭や大切な持ち物の中に石があらわれ、それが重要な治療的転機となることもしばしば見受けられる (Ueda, 2012)。心理療法の実践から見ると、石のイメージの中に治癒的な働きがひそんでいることは明らかになってきているのである。ゆえに、石を描画対象とする検査法が開発できれば、パーソナリティ研究や心理療法のアセスメントにとって非常に有意義なものになる可能性があるだろう。

以上を踏まえ、筆者は石を描画対象とした心理検査 (以下、Stone Test) の開発を着想した。そのためにはテストの施行法を確立し、描画特徴の指標化を行う必要がある。また、他の心理検査との関係から併存的妥当性も確かめられなければならない。さらに健常者群と臨床群との比較研究まで視野に入れる必要があるだろう。そこで本研究では、テスト開発のための基礎的研究として、Stone TestとCattell Anxiety Scale (キャッテル不安診断検査) との関係を検証し、そこから石の描画特徴の指標化の可能性と施行法の課題を検討することを目的とする。

Ⅲ 方法

1. 予備調査

予備調査として、大学3年生23名を対象に、石を対象とした描画とBaum Testを施行し、両者を比べながら、石の描画について「描きやすさ」や「気になること」等についてインタビューをおこなった。その結果、「石（あるいは岩）」という教示だけでは描画するときに困惑してしまう」という意見が多く出された。また、石の描き方で特徴的なものとして、石の大きさ、石の数、石が置かれた位置、石の手触り感、石と生物が接しているか等があり、これらを指標として検討すべきと考えられた。

2. 本調査

被 験 者：国立大学の学生 148 名（男性 39 名，女性 109 名／年齢 18 歳 -26 歳 SD=1.12）

実施時期：2015 年 11 月 -12 月

実施方法：心理学関連科目の講義終了後に協力をお願いした。用紙は無記名式で配布した。まず、調査の目的を説明し、続いて協力したくない場合はしなくてもよいこと、結果はすべて統計的に処理され、個人情報保護されることを伝え、了承してもらえた人に協力をお願いした。

① Stone Test

予備調査により、石だけでは描画に導入しづらいことがわかったため、風景構成法を参考に次のように教示を工夫した。「今から言うものを順に描いていって、最終的に風景になるように仕上げてください」と言い、①石（あるいは岩）、②人、③木、④その他、の順にアイテムを伝え、描画するよう教示した。石（岩）を最初に描画アイテムとして提示したのは、石の紙面上の位置によって地面が確定されること、また最初の石の大きさによってその後のアイテムの位置づけや大きさ等も規定されると考えられるためである。これは風景構成法で「川」が最初に提示されることによって空間配置の大枠が決定されること、またその後のアイテムの配置から被験者の構成力を見ることができると考えられていることと同義である。

② Cattell Anxiety Scale（キャッテル不安診断検査：以下 CAS）

園原ら（1960）により日本語訳されたものを使用した（40項目・3件法）。合計点で全般的な不安の高さを見るほか、下位因子として（Q3）＜自我統御力の欠如＞、（C）＜自我の弱さ＞、（I）＜疑い深さ＞、（O）＜罪悪感＞、（Q4）＜衝動性＞の5因子をもつ。

CASを用いた理由は以下の通りである。本研究は石の描画特徴とパーソナリティの特徴との関係を見るものであるが、探索的に行うため、ある程度幅広くパーソナリティの特徴を網羅しているものがよいと判断した。そのうえで、施行が比較的容易で、被験者に負担をかけないものということでCASを選択した。

IV 結果

回答に不備のある3名を除外して、145名を分析対象とした。

分析に入るにあたり、まず、臨床心理学を専攻する大学院生1名の協力を得て、石の大きさや石の紙面上の位置など分類が必要な指標について分類した。意見が異なったものについては話し合っ

1. 石の大きさとCAS得点の関係

石の大きさを「極大・大・中・小」の4分類にし、それによって被験者を分け、CAS得点との関係を見た。石が複数置かれた場合は、その中でもっとも大きく存在感のある石を評価の対象とした。分散分析の結果、CAS合計点及びすべての下位因子との間に関係は見られなかった。

2. 石の数とCAS得点の関係

石の数については、一つだけ描いてある群（単独群）と複数描いた群（複数群）とに分け、対応のないt検定をおこなった。その結果、CAS合計点やほとんどの下位尺度との間には関係が見られなかった。しかし、CAS (Q4) <衝動性>においてのみ、「石単独群」と「石複数群」の間に有意な差が見られ、石を複数置く群の方が石を一つだけ置いた群に比べ衝動性が高かった ($t=-2.57$, $p<.05$ Table 1)。

Table 1 Number of Stones and CAS score

Number of Stones					
	Single N=51		Multiple N=94		t値
	M	SD	M	SD	
CAS(Q4)	7.29	3.26	8.73	3.19	-2.57*
(衝動性 impulsivity)					自由度 143
*p<.05					

3. 石の位置とCAS得点の関係

描画の中心となっている石について、その用紙上における位置を「上段・中段・下段」の3群に分けた。分散分析の結果、CAS合計点 ($F=3.88$, $p<.05$) とCAS (Q3) <自我統御力の欠如> ($F=4.97$, $p<.01$), CAS (C) <自我の弱さ> ($F=3.11$, $p<.05$) において有意な差が見られた。多重比較の結果、いずれも「下段に置いた群」が「中段に置いた群」に比べ、不安得点が高かった (Figure 3)。Figure 4には石下段群の描画例を示した。

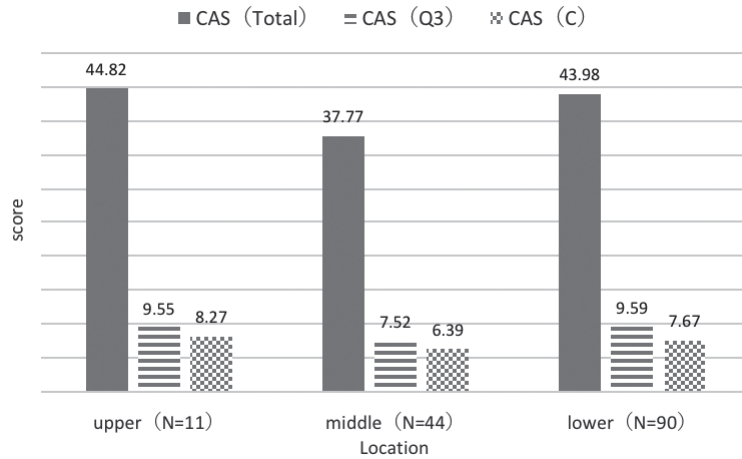


Figure 3 Location of Stones and CAS sore



Figure 4 石下段群の描画例

なお今回の結果では、上段に置いた群も高いCAS得点となっているが、中段群との間に有意な差は見られなかった。これは石を上段に描く被験者が少なかったことが影響していると推測され、慎重な検討が必要だと考えられる。

4. 石と木の位置とCAS得点の関係

今回は石のほかに木も描画させたため、石と木の位置関係が指標になりうるか確認した。被験者は木の根元に石を描いたもの（33名）、石と木が離れているもの（112名）であった。両群について

CAS得点との関係を見たところ、CAS合計点及びすべての下位尺度について有意な差は見られなかった。

5. 石と人物の接触とCAS得点の関係

石と人物が接しているものが46名(31.7%)いたため、「石と人物が接しているか否か」で不安得点の差を見た。全般的に、接している群がそうでない群に比べ不安の高い傾向が示唆されたが、いずれのCAS得点でも統計的に有意とはならなかった。ただし、CAS (Q4) <衝動性>においては、石と人物が接している群の方がそうでない群に比べ10%水準で<衝動性>が高い傾向にあることが示された ($t=1.89$, $p<.1$ Table 2)。

Table 2 Contact with Stones and CAS score

Contact with Stones					
	Contact N=46		Not contact N = 99		t値
	M	SD	M	SD	
CAS(Q4)	8.97	3.36	7.87	3.19	1.89 ⁺
(衝動性 impulsivity)					自由度 143
					+p<.1

さらに、接し方について分類した。接し方は「石に腰掛けているもの」と「石に隠れているもの」が多かったため、「その他」も含め3群で同様に分散分析を行ったところ、CAS (C) <自我の弱さ>において、「石に隠れている群」が「その他の接し方」より不安得点が高いことが明らかとなった ($F= 2.84$, $p<.1$ Figure 5)。Figure 6には石に隠れる群の描画例を示した。

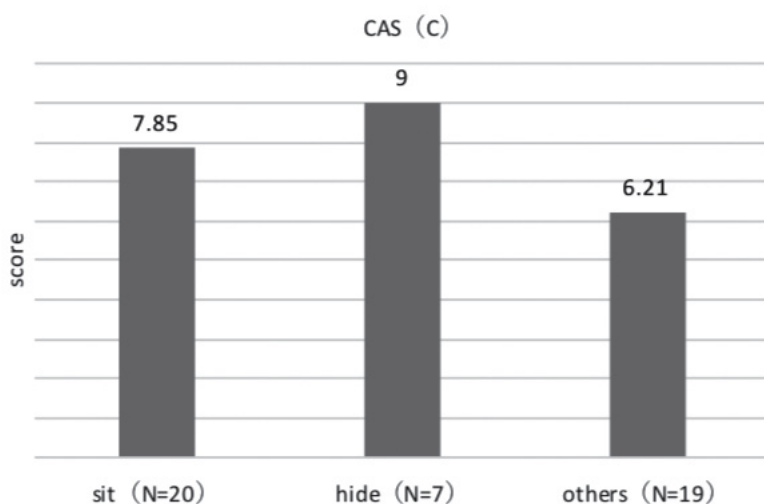


Figure 5 Contact with Stones and CAS score

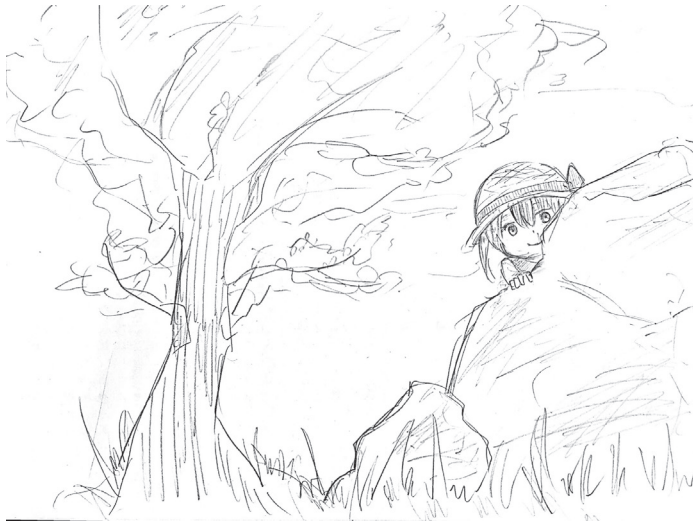


Figure 6 石に隠れる群の描画例

V 考察

1. CAS得点と関連が見られなかった描画特徴

石は、大地と密着しているという属性から「安定性」や「根源性」などのイメージをもつ。九門(1990)は、石のもつイメージとは“その寂の思想の「自然さ、静けさ、古めかしさ、内包的、安定感、それから来る自ずからなる品位」である”と表現した。石はまた、ある種の「精神性」のイメージももつ。Jaffé, A (1964)は世界各地の神話や伝説の分析から、石がしばしば神の住処や精神そのものといったイメージを与えられてきたことを明らかにしている。わが国でも、石は「靈魂」の容れ物であると考えられ、ゆえに石を祀る習俗が盛んであることが知られている(折口, 1995)。

このようなことを鑑み、本研究では、まず描画させた石の大きさが何らか個人の不安傾向を反映しているのではないかと考え、検証したが、特に関連性を見出すことができなかった。これについては、大きければよいというものではなく、小さな石ころの中にも「根源性」や「精神性」といったイメージを見出す心の働きがあるのかもしれない。ゆえに、石のサイズと不安傾向との間に明確な関連を見出せなかったのではないだろうか。ほかにも、被験者が石をイメージしたか岩をイメージしたかで意味合いが異なっていた可能性があるだろう。石と岩の違いは厳密ではないため、本研究では「石あるいは岩」という表現で教示をしたが、今後教示方法も含めさらなる検討が必要である。さらに、分析方法として、今回用紙に対する絶対的な大きさを基準としたが、一方でアイテム中の人物との相対的な大きさで判断する基準もあり得たと思われる。いずれにしても、石の単純な大きさを心理検査の指標とすることが難しいことがわかった。

また、石と木の関係についても、現時点では個人の不安傾向と明確な関連性を見出すことはできなかった。今回の調査では、「石」の他に「木」と「人」を描かせる方法をとったが、これは石を

描くという行為をより自然におこなわせるためであった。本手続きは、今のところ描画をスムーズに行わせる以上の意味はないようであった。ただし、今回は石と木の位置関係しか検証することができなかったため、位置関係以外にも検証すべき点があるかはさらに検討する余地がある。

2. 指標となりうる可能性をもつ描画特徴

石の置かれた位置について

本研究で最もはっきりと差が見られた指標は、石が置かれる位置であった。筆者は当初、石を中段のような不安定な位置に置く者は不安得点も高いであろうと予測していたが、結果は異なっていた。むしろ、石を中段に置くの方が不安が低い傾向にあることが明らかとなった。今回の結果はどのように理解すべきであろうか。

これは、単純に石のもつ「固さ」「冷たさ」「無機質さ」といったネガティブなイメージの反映として解釈することは難しいだろう。なぜなら、石にネガティブなイメージしかないならば、画面の中ほど、つまりより中心的な場所に置いた場合、それらネガティブなイメージが主題とならざるを得ず、それ以外の位置に置く者に比べ、不安傾向の高さを示していると考えるのが自然なためである。しかし、本研究では石を下段に置いた群に比べ、石を中段に置いた群の方が不安傾向が低かったのである。これは、むしろ先に挙げたような石に内包されるポジティブなイメージが反映された反応であると考えた方が理解しやすいと思われる。石には「エネルギーを秘めたもの」「永遠の生命を感じさせるもの」といった神秘性・精神性を含むポジティブなイメージの方が主であり、ゆえにそれを自然に中心的な位置に据えることができる人は不安の低い人だったのである。

これを不安の高い側の人から見ると、次のように言うこともできるだろう。石には「安定性」「根源性」といった、いわば「深いところとつながり、支えてくれるもの」というイメージもあり、それは石の大きさや形ではなく、それが地面/大地に近いということによって強調することができる。すなわち、一見逆説的に思われるが、石を下段に置いた者は、石のもつ安定感や落ち着きのイメージを強調し、自らの不安な状態を収めようとしたと考えることができるのではないだろうか。

石と人物の接触について

石と人物の関係には指標となりうるいくつかの特徴が見いだされた。まず、全体の被験者のうち、約3割の被験者が石と人物がなんらかの形で接していた。しかも、石に接している群の方が、そうでない群に比べ不安の高い傾向が見られた。これは大変興味深い結果であった。

さらに接し方については「座る」タイプと「隠れる」タイプが多かった。特に、石に隠れる群の不安得点が高かった。これらの結果についても、石を下段に置く者の不安傾向が高かったことについて考察したのと同様に、石のもつポジティブなイメージから解釈できると考えられる。すなわち不安であるがゆえに、石のもつ「安定性」「根源性」といったイメージに反応し、自然と石に接していたい、または石の背後に隠れたいという描画となったのではないだろうか。

ほかにも解釈の可能性として、石が人間の精神や心的なものを象徴し、そこから進んで「反自然」

のイメージが与えられてきた点は見逃せないだろう。実際わが国の作庭作法においては、東福寺の石庭（Figure 1）にあるように、石はわざわざ「立てて」置かれることが常である。庭に石を置くことは決して単なる自然の模倣ではないのである。むしろ、人間の意志の強調でさえあるのである。これは石が「いし（意志）」と読めることと無関係ではないだろう。矢内原（1990）はこの作庭の技法について「石は自然に抵抗する自然である」と言ったが、＜不安という自然＞に対抗しようとする人間の意志の現れとして石を見ることにより、石と接することが不安の高さの指標であったことについて理解することが可能となるかもしれない。

Stone Test 成立の可能性について

ここまで、石を対象とした描画のいくつかの特徴が明確に不安と関連があることが確かめられたことにより、Stone Testが描画テストとして成立することについては十分期待できると思われる。

特に、今回用いたCASによる不安傾向の内容を細かく見ると、Stone Testとの間に有意な差が見られた下位得点は＜衝動性＞（項目例：困ったことに会おうと、興奮したりあわてたりしやすい等）と＜自我の弱さ＞（項目例：夜中にふと目がさめて心配事で眠れないことがよくある等）が目立っていた。これらの不安傾向は、石のもつ「根源性」や「安定性」のイメージが反映されやすい側面であったと考えられる。一方で、＜疑い深さ＞や＜罪悪感＞とはほとんど関係がないようであった。いずれにしても、石のイメージには投影されやすい人格的側面とそうでない側面があることが推測された。

ただし、Stone Testの結果の解釈はBaum Testに比べさらに難しいことも予測される。Baum Testでは、樹木について幹の太さや高さ、枝ぶりの繁茂など、拡大・成長する（expandingな）方向性は基本的にはポジティブなサインとみなされている。それは樹木の生命的なイメージとつながったものである。そのため、指標の解釈と直感とにずれが少ないであろう。しかし、石の場合は、全体的にはむしろBaum Testに見られるような傾向とは反対の傾向を示したともいえる。すなわち、数の少なさや位置が中段であることなどがポジティブなサインだったのである。逆に、数が多いこと、下段に配置することなどはネガティブなサインだったのである。本研究ではそれらを、石の中にある「安定感」「根源性」「精神性」などのポジティブなイメージを用い「不安定な状態を鎮め」ようとした反応として解釈できることを示した。ただし、このような解釈は十分な妥当性をまだもち得ていない。いみじくもJung（1963）が指摘したように、石の中にはポジティブなイメージとネガティブなイメージが分かちがたく混在している。そのことによる解釈の難しさが、Stone Test成立へ向けた大きな壁であることは間違いないだろう。

Ⅵ 今後の課題

今後の課題としては、大きく三点あげられる。

第一は教示に関するものである。今回は石の数を指定しなかったために、石が複数描かれた場合、どの石を評価すべきか迷うケースがあった。今後は石を一つに限定して描かせる教示に修正していくべきであると考えられる。また、今回は描画全体がスムーズにおこなわれるように、石のほかに数アイテムを順に提示する方法をとった。木も描画対象として指示したが、石と木の関係についてはCAS得点との間に何らの関連性も見出せず、現時点では意味のある手続きとは考えられなかった。石のほかにアイテムを描画させる場合の手続きについても今後の課題である。

第二は他の指標の検証に関するものである。特に今回は石の形態(shape)について扱うことができなかったが、実際の描画にはさまざまな形の石が現れたので、今後なんらかの基準を作り、石の形態が指標となりうるか確認したい。

第三は解釈に関するものである。特に今回の分析結果がわが国に特徴的なもの、すなわち「日本的なもの」であるかどうかについて慎重に検討する必要がある。本論文の前半で、日本人の石に対する愛着と独特の感性について述べたが、折口信夫の論考を繰り返すまでもなく、日本人にとって石は特定の宗教を超え、宗教心そのものをあらわすほど重要な対象である。また石庭に見られるような石に対する繊細な美的感覚も存在することが想定される。実際に今回の描画の中で、石にしめ縄を施した者や明らかに石庭のような風景を描いた者などが相当数いたことはそれをあらわしているだろう。本研究における石の描画と不安傾向との関連に、そのような日本人独特の石への感性が影響していた可能性は高いだろう。ただし、今回の結果が日本的なものであったとしても、それはStone Test成立にとって直接マイナスなことではない。むしろある対象について民族特有のイメージが付与されるのは当然のことであり、そこからスタートして、より普遍的な石イメージを検討し、Stone Testを構成していけばよいのである。そのような比較文化論的な検討も今後の課題である。

Ⅶ おわりに

多くの臨床報告や本研究の結果からも、石が、われわれの心の深層から複雑で多様なイメージを呼び起こす対象であることに疑いはない。

本研究はスタートしたばかりであり、改善すべき点や確認しなければならない点など課題は多い。それでも、もし本研究が結実した場合、Stone Testはわが国発のユニークな描画テストとして、Baum Testに匹敵するほど方法が簡便で、かつ人格の多様な側面が測定できる検査法となる可能性があるだろう。さらに、石イメージの多様性や治療的意義についても知見が得られることにより、描画テスト開発だけでなく、箱庭療法の治療機序の解明や風景構成法の解釈にも役立つと考えられる。今後も継続して、本検査法の検証と改善をしていくことが望まれる。

文献

- Chevalier, J and Gheerbrant, A: *Dictionnaire des Symboles*. Robert Laffont et Jupiter. 1982. (金光仁三郎・熊沢一衛・小井戸光彦・他訳. 世界シンボル大辞典. 大修館書店, 1996.)
- Jung, C.G.: *Memories, Dreams, Reflections*. Pantheon Books. ユング自伝 1. 2. 1963. (河合隼雄・藤縄昭・出井淑子共訳. みすず書房, 1972/1973.)
- Jung, C. G., von Franz, M. L., Henderson, J. L., Jacobi, J., and Jaffé, A.: *Man and his Symbols*. Aldus Books Limited, London. 1964.
- 唐木順三：石. 日本の名随筆88 石. 作品社, 29-33, 1990.
- 河西恵子・伊志嶺美津子・千葉智子・櫃田紋子：風景構成法における臨床的基礎研究—青年期女子と精神分裂病者の「石」に関しての一考察. 横浜女子短期大学研究紀, 13: 1-16, 1998.
- Koch, K: *Der Baumtest*. 3. Auflage. 1957. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳：バウムテスト [第3版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房, 2010.
- 九門正雄：愛石志 抄. 奈良本辰也編 石. 作品社, 47-56. 1990.
- 森蘊：「作庭記」の世界—平安期の庭園美. 日本放送出版協会, 1986.
- 折口信夫：靈魂の話. 折口信夫全集 3. 中央公論社, 248-263, 1995.
- 澤田朝子：おとぎ話における石化. 日本箱庭療法学研究, 24 (2): 51-64, 2008.
- 園原太郎・対馬忠・辻岡美延・対馬ゆき子：CAS不安診断検査解説書. 東京心理株式会社, 1980.
- Ueda Takuya: *Stones in the City – Meaningfulness and Meaninglessness of Stones –*. *Journal of Sandplay Therapy*, 21 (1): 113-123, 2012.
- 矢内原伊作：石との対話 抄. 日本の名随筆88 石. 作品社, 218-233. 1990.

謝辞

本研究のデータ処理と分析については、愛知教育大学大学院学校教育臨床専攻修士2年生の清水千尋さんの協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

付記

本研究はJSPS科研費 15K13141の助成を受けたものです。